

いのちを大切に作る心を育む

近年、少子化や自然体験の不足等により、子どもたちは、兄弟・姉妹や仲間とけんかをした経験や、生き物の死に遭遇した経験が少なくなり、「いのちの大切さ」を実感することが難しくなっています。

身近な動植物にも生命があり、いつか死が訪れること、自分の誕生や成長には多くの人関わっていることなどを通して、「いのちの大切さ」を日々の生活の中で、できるだけ多く感じ取らせることが大切です。

県内のすべての学校では、**道徳の授業**をはじめとして、あらゆる教育活動を通して子どもたちに『いのち』のかけがえのなさや、夢や希望をもって生きること、人への思いやり、互いに支え合って生きることの大切さを実感してもらう「いのちの授業」を行っています。

子どもたちを取り巻く社会環境が大きく変化する現在、いじめや自殺等が全国的に大きな課題となっている中、「いのちの授業」の必要性や重要性はますます高くなっています。

また、「全国学力・学習状況調査」の結果から、神奈川県の子どもたちについては、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標を持ってい

るか」といった心の面において、更なる働きかけが必要であるという課題が明らかになりました。

そこで、県教育委員会では、「自己肯定感を高めるための支援プログラム」を作成し、大人たちが子ども・若者に、どのように関わればよいか、プログラムとして示しました。

自己肯定感は、「自分が価値ある人間であり、自分の存在を大切に思う気持ち」のことであり、「ありのままの自分や、自分の存在そのものを



いのちを大切に作る心

あらゆる生命を尊重し、感じる心や感謝する心、思いやりの心をもち、生きることのすばらしさを自覚すること

学校では、「いのちの大切さ」が子どもたちの心に浸透するように、道徳教育を中心に取組を進めています。また、自分の大切さとともに、他の人の大切さを認めることができるよう、人権教育にも取り組んでいます。

家庭では、どのように子どもたちに伝えているでしょうか。

認められる」ことによって育まれます。

子どもの「ありのままの姿を受けとめる」ことは、とても難しいように感じられるかもしれませんが、それほど難しいことではありません。

「おはよう」「おやすみ」や「がんばったんだね」などの言葉かけや、子どもが話しかけてきた時には、作業の手を止めて、子どもと向き合い、話を聞くことや笑顔で接することなどが、子どもの存在を認め、ありのままの姿を受けとめることに深くつながっているのです。

「わたしはわたしでよいという思い
(自分が好きという気持ち)」
ありのままの自分を大切に思う心
「自己肯定感」を育てましょう

自己肯定感を高めるための支援プログラム

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/v3p/seitosidou/jikokouteikan.html>



～学校における人権教育～

学校における人権教育は、授業だけでなく、教育活動全般を通して、様々な場面で行われています。

人権教育の目標は、児童・生徒が発達段階に応じて、人権の意義や内容について理解し、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになり、それが、様々な場面で具体的な態度や行動に現れるようにすることです。

県教育委員会では、「かながわ人権施策推進指針（改定版）」に基づき人権教育を総合的に推進しています。